松江キャンパス地域共生へのアプローチ

小泉 凡　(4/1開設)しまね地域共生センター長

Matsue Campus: A Mutualistic Approach to Community

Bon Koizumi
Opening Ceremony April 1 - Shimane Center for Enrichment through Community Chief

矢島　それでは、最後になりますが、プログラム5番、全体総括、「松江キャンパス地域共生へのアプローチ」となります。本年4月1日開設のしまね地域共生センターセンター長、小泉凡先生より総括いたします。小泉先生、お願いいたします。

小泉　それでは、失礼いたします。

皆様、本当に長時間おつき合いいただきましてありがとうございました。すばらしいご発表をしてくださいました先生方、懇篤なコメントをいただきましたコメンテーターの皆様に心より感謝申し上げます。かなり時間が押しておりますので、本来は25分時間がとってありましたが、5分だけまとめの時間をいただきたいと思います。

こうして同じ職場の同僚の発表を聞かせていただくという機会も、私にとっては今回初めてでした。3学科それぞれのカラーと個性溢れる発表だったと思いますが、同時に3学科の地域志向研究の重なりも確認することができました。今、高橋一清先生もおっしゃいましたように、最初から研究ありきでやっているのではなくて、教育活動や地域貢献活動が研究に発展したものも多く、教育・研究・地域貢献がうまく自然な形で結びついているという印象も覚えました。この流れを新しくできる「しまね地域共生センター」がしっかりと支援し、地域連携活動のいっそうの発展を実現したいと思っております。

では、スライドをご覧ください。ようやくロゴも決まりました。しまねの「ま」だけ色が違いますが、これは島根県の花、ボタンの色をイメージしたものです。デザインは石川陽春さんにお願いしました。

従来、島根県立大学の3キャンパスそれぞれに、地域連携推進センターがございまして、松江キャンパスでは公開講座、教育連携、学生ボランティアの推進を柱にした地域連携活動の推進につとめてまいりました。20年余りの歴史をもつ公開講座「椿の道アカデミー」につきましては、今年度は12講座ございましたが、来年度は14講座となり、学外の団体と連携した講座も増えます。

また、各学科による個性を生かした地域研究

活動、教員と学生による地域の支援活動や学外事業への協力をしてまいりました。地域志向の授業は現在3学科合計で22科目を開講しておりますが、来年度以降、さらに地域志向の授業を充実させる計画です。

教員個人による地域活動も、24年度の場合ですと講演会講師が50件、審議会委員等も52件ほど出ておりまして、比較的活発な活動をしてきたように思います。

そして、こういった従来の活動に加えまして、先ほど冒頭に山下副学長からお話がありましたように、8分野での地域課題解決に向けた共同研究とその成果を生かした履修証明プログラムの展開、そしてセンターの紀要を発行していく予定です。そういった一連の地域連携活動をキャンパスプラットホーム、しまね地域共生センターが統括していくことになります。

もう少し踏み込んで、センターの事業内容を、教育・研究・地域貢献の分野に分けてご説明します。

教育に関しては、26年度、社会人基礎力の養成と地域でのボランティア活動の意義を体感する目的で「ボランティア・プログラム」という授業を、平田のサンレイクと連携し開講します。また、従来の松江市との教育連携会議を拡大した教育連携協議会を設置し、年1回開催していく予定です。

研究に関しては、助成金の種類を問わず地域志向研究の窓口を一本化し、教員の研究情報を把握し、適切な支援をしていくようにつとめたいと思います。そして、さきほどからでております地域課題に応える8分野の共同研究の推進につとめていきます。本日、その準備会が行われておりますが、26年度からは年1回、センター研究協議会を開催するとともに、紀要を発行します。

そして、地域貢献活動としましては、生涯教育の推進、学生ボランティアの推進、各学科・サークル・個人による地域貢献活動の推進につとめていきます。さらに、28年度以降になりますが、8分野の共同研究の成果を生かした社会人向けの履修証明プログラム「地域共生専門コース」を実施する予定です。実際これが始まりますと研究の成果が地域貢献活動となってあらわれ、地域の専門家の養成が実現することになります。

4月1日から本学2号館の3階に「しまね地域共生センター」専用の部屋ができます。そして、そこには3名の地域連携コーディネーターと、事務職員1名が常駐するとことになっております。今日は、地域連携コーディネーター就任予定者のうち山尾先生と小倉先生に会場へおこしていただいております。

なお、しまね地域共生センターでは、5月14日（水）午後にオープニング記念講演会の開催を予定しております。まだ、詳細は未定ですが、本学の大講義室で労働経済学の研究者で、東京大学社会科学研究所教授の玄田有史先生に「希望のしまね、しまねの希望」と題してご講演をいただく予定です。玄田先生は松江南高校の卒業生でもあり、島根にゆかりの深い方です。そして希望学という新しい分野を切り拓いた方です。ぜひお出かけいただければと思います。

地域の時代といわれる近年、地域振興や持続可能な地域社会の実現のために、さまざまな新しい概念が提示されています。例えば、文化資源ですね。2000年に東京大学大学院に文化資源学専攻が設置され、3年後には学会も誕生しました。本学の総合文化学科の中にも文化資源学系がございますが、地域の文化を掘り起こして再評価、つまり「ないものねだり」ではなく「あるもの探し」をして、それを地域活性化などに役立てる方法を考えようという新しい学問分野です。

それに続いて2004年ごろ、アメリカのたいへん親日的な経済学者のガルブレイスが、GDPに対してGNEという言葉を提案しました。”Gross National Enjoyment”、つまりどれだけ物をつくるかから、どれだけ知的な喜びで人生を満たすかという価値観にシフトする時代になると預言したのです。

さらに、6次産業化であるとか、中国地方で生み出された言葉である里山資本主義、つまりマ

ネー資本主義に対峙する言葉で、燃料と食糧を自給して域内循環で営もうという考え方です。またコミュニティーの創造性に価値を置く創造的地域社会という概念も提示されています。

これらに共通する志向性は何なのでしょうか。恐らく今までは限りなき経済成長を追求する、大量生産、大量消費を是とする時代だったのです。これからはそうではなく持続可能な共生社会の実現を目指す時代です。ご紹介したいくつかのキーワードとなる言葉は、社会全体がそういう方向性にシフトしていく中で生み出された概念なのだと思われます。

本田学長もおっしゃっていますように、島根県立大学としましても、持続可能な共生社会の実現に向けて力を尽くすことは大きな願いでもあるわけです。今後、松江キャンパスでは3学科が連携して、また多くの地域の自治体、団体、住民の皆様との関わりを大切にしながら、地域貢献活動を行っていきたいと考えております。

また、受託研究という方法もございますので、どうぞお気軽に地域課題を携えてしまね地域共生センターをお訪ねいただければと思います。

それでは、今日は長時間、本当にありがとうございました。総括の言葉にかえさせていただきます。（拍手）